

社会学的調査研究方法としての「コミュニティ疫学」 —ペットフレンドリーなコミュニティ調査から—

“Community Epidemiology” as a Sociological Method:
from a Pet-Friendly Community Study

大倉 健宏

麻布大学生命・環境科学部
〒252-5201 神奈川県相模原市中央区淵野辺 1-17-71

Takehiro OKURA

Seminar on Community Studies, School of Life & Environmental Science, Azabu University,
1-17-71 Fuchinobe, Chuo-ku, Sagami-hara, Kanagawa 252-5201, Japan

Abstract: One part of the research investigates the epidemiological aspect, and the other the sociological aspect. As a result of this research, we would like to find out what is or are the critical conditions for building “pet-friendly communities”

Recently, as smaller dogs have increased in popularity, the tendency for dogs to be kept indoors has also increased, thus leading to closer contact between pets and their owners. As a result, diseases exchanged between dogs and their owners have been more frequently observed.

While the spread of dental caries (tooth decay) between dogs and owners does not occur, it is possible that periodontal diseases (gum diseases) could be spread between them. Our study focuses on the bacteria “*Campylobacter rectus*”, a cause of periodontal disease, and aims to identify this bacteria in dogs and their owners by conducting a DNA level analysis.

Key words: Social Epidemiology, Pet-friendly Community, Pet Oriented Friends, periodontal diseases

はじめに

地域社会調査研究の方法として、どのような可能性があるのだろうか。筆者は2012年に『エッジワイズなコミュニティ——外国人住民による不動産取得をめぐるトランスナショナルコミュニティの存在形態』と題する著書をハーベスト社から刊行した(大倉, 2012)。この著書では新宿区大久保地区と豊島区池袋地区の宅建業者を対象として、56件の聞き取りと質問紙調査を行い60票の有効回答を得た。これらのデー

タを用いて、外国人住民の不動産取得について実態を明らかにした。いま改めてこのデータを振り返ると、地域社会のリアリティに迫ることの難しさを実感している。このような困難を背景として、筆者は新たな方法の可能性を探る課題に着手した。一つの回答が、本稿で示す「コミュニティ疫学試論」である。地域調査と疫学や公衆衛生学との出会いの可能性である。

I. 大久保・池袋宅建業者調査をめぐる

筆者が2008年から2010年にかけて実施した、大久保・池袋宅建業者調査では、調査研究のフィールドで

ある，東京都豊島区池袋地区および新宿区大久保地区を「エッジワイズ (Edgewise) なコミュニティ」と表現した。ここで用いた「エッジワイズ」とは，二つの鋭い線によって隔てられた，異なる面が接する状態を形容している。具体的には多文化社会の日常的な接触のあり方を示している。また，派生語として，隔てられていた両者が，話す機会を持つという意味をあわせ持っている。この研究において取りあげたフィールドは，エッジワイズな構造を持っている。具体的には，地域に暮らす外国人住民と日本人住民であり，制度的な存在としては地元宅建業者と外国人経営の宅建業者である。宅建業は特にエッジワイズなコミュニティ構造を明確に具現化している。以上の意味で二重のエッジワイズな構造にあるコミュニティと表現した。

II. 新たな研究の枠組み構築に向けて

具体的な空間・地域における調査研究と，理論との関係をどの様にとるべきか。ラリー・フォード (Ford, 1991) のハイブリッドな理論応用モデルを手がかりとして，社会学的補助線を引く事とした。フォードは都市に対して多様なアプローチを前提とする，ハイブリッドな理論応用モデルを提示している。

フォードによれば調査研究や経験的研究は，マクロ・メゾ・ミクロの理論レベルを経て空間に接近する。マクロ理論レベルでは，マクロ経済，マルクス主義，文化理論を視座とする。メゾ理論レベルでは制度的なもの，調整構造やその担い手を視座とする。ミクロ理論レベルでは個人の行動，通底的行動が視座となる。これらの三つの理論レベルが，三つの空間レベルに浸透する形で，具体的な場所におけるインパクトが表れる。三つの空間レベルは，「ミクロな建築・人工空間環境」，「メゾ空間・組織・形態論」，「マクロな物理的位置」からなる。メゾ理論レベルにおいては，ウェーバー的な制度論，トレンドのアプローチであり，都市変容を方向づけるゲートキーパー・マネージャーの増大する役割権力を検討しうる。ここでのゲートキーパー・マネージャーの役割として⁽¹⁾，エスニック・グループと不動産業者を挙げている。

筆者が行った，具体的な地域における調査研究は，フォードが論じるように，マクロな理論とミクロな理論に挟まれて，両者との相互関連性を意識する必要が

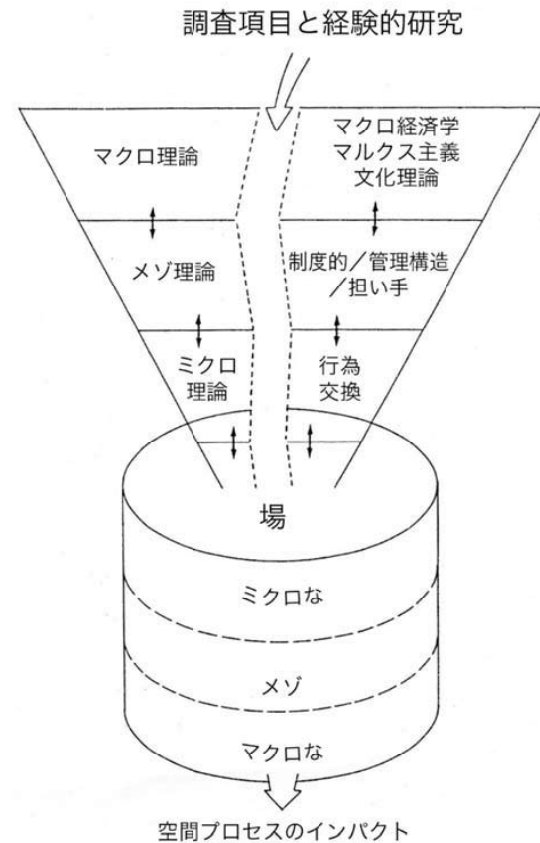


図1. 中心都市構造における理論空間
出典は Ford 1991: 19 ©大倉健宏 2012 字句を一部修正

あった。また，本研究において取りあげる不動産業者は，フォードのいうメゾ理論レベルにおける，ゲートキーパー・マネージャーの役割を持つと考えることができた。

III. 書評で指摘された地域調査の課題

前述の『エッジワイズなコミュニティ』は3編の書評に恵まれた。武田里子 (2012) と竹中英紀 (2013) では，調査対象としての宅建業者について批判がされている。武田によれば，「宅建業者の調査では限界があったのではないかと考える。顧客であるアジア系外国人像は，宅建業者の印象の範囲に留まるからだ。」(武田, 2012: 1) として調査の限界を指摘している。竹中は「政府や金融機関のいかなる政策変化があったのか」を調査する必要があること，筆者が示した「下からの制度設計」は組織化された都市社会運動の形をとるとは限らないことを指摘している。筆者が「ゲートキーパー」としての宅建業者を調査対象に選んだの

は、ラリー・フォードによるハイブリッドな理論応用モデル (1991: 16) を採用したからである。フォードのいうメゾ理論レベルにおいては、都市変容を方向づけるゲートキーパー・マネージャーの増大する役割権力を検討する。武田 (2012) の言うように、アジア系住民の住宅取得については、「日本政府による住宅金融政策」があるだろう。この研究が目指したメゾレベルにおける分析では、ゲートキーパーとしての宅建業者を、その政策の具体的なアクターとした。そこから見えるものは武田の聞き取り調査から得た像とは異なるかもしれない。しかしながら、「日本政府による住宅金融政策」は住宅取得を希望するアジア系住民だけではなく、アクターとしての宅建業者、そして「コーポレイティブ・チャンネル」自体も等しく影響を受けていることを確認したい。

広田康生による書評 (広田, 2013) では、筆者の方法に対して「場所」をキーワードとして批判がされている。筆者は新原道信 (2006)、町村敬志 (2006)、デランティ (2003) をあげ、彼らが論じる「新たな枠組みを、どの様に肉付けを行うか」を課題として位置付けた。広田の批判は「トランスナショナル・コミュニティ」が特定の「場所」を持っているということ指摘する。広田は望ましい方向性として、日常レベルから国家などによるさまざまな拘束性をどのように「ずらし」、「乗り越えるか」という観点からの研究を示した。さらに、広田は「マクロ、メゾ、ミクロは、「場所」に同時に発現する」と重要な指摘をした (広田, 2013: 179-80)。これらは筆者にとっては本質的な指摘である。これらの指摘は言い換えれば「場所」とアクターの問題であり、メゾレベルの方法を選択し志向したとしても、マクロ・メゾ・ミクロを通底する分析を再考しなければならないと痛感する契機となった。

IV. コミュニティ疫学への着想

「エッジワイズなコミュニティ」での分析を読み返して、いつも感じたことは対象との距離感、「社会的なピント」についてであった。さらに広田が指摘する「場所」の問題を、新たな課題にしなくてはならないことであった。さらに広田は「マクロな国家制度とミクロな具体的制度、実践を繋ぐ諸制度の、正当化のロジックないしは象徴政治の展開」 (広田, 2013:

180) を分析する必要があることを指摘している。この指摘からは、メゾレベルから離れて、ミクロなレベルからマクロへと通底する複眼的視点へと、方法の転換をしなくてはならない。目の前の小さなものから、背後にある大きなものへの視座である。このことを具体的に考えるうえで、フィールドのサイズについて考えた。真っ先に、いずれもイギリスの社会学者であるレイダーによる”Doing Excellent Small-Scale Research” (Layder, 2013) とナイトによる”Small-Scale Research” (Knight, 2002) に学んだ。

レイダー (2013) は科学的適切性と厳密性の観点から、記述と説明をはっきりと区別する必要性を指摘している。彼の言葉であれば How から Why へ、すなわち事実の記述と「なぜ」にこだわること、あるいは純粹でシンプルな記述を乗り越える試みを示そうとした。さらに優れた調査方法とは、その方法の「弱点」に意識的であることをあげている。加えて筆者の琴線に触れたのは、調査方法が対象としている問題に適合しているか、調査が証拠第一主義になってはいけないこと、調査はあくまでも説明のためのツールであるという点であった (Layder, 2013: 5-7)。

広く社会科学を講じたナイト (2002: xi-xii) は、Small Scale Research について論考している⁽²⁾。ナイトは調査を真理の追究としての調査から、正しい方法としての調査へ位置づけることを試みる。2人の著書タイトルに共通する“Small Scale Research”について、ナイトは「スモールスケール調査の定義」として「1人の研究者がかかわるシステムティックな研究、限られたまたは資金がなく、研究と報告を成し遂げる時間がとても短い研究」としている。加えて、探究者自身にとって価値がある、調査協力者にとって価値がある、幅広く実践・政策・理論にとって価値がある調査の重要性を強調している。このような二人の議論と対象との距離感、そして「場所」の問題を考える中で、数年間あまり意識もせず取り組もうともしなかった方法のヒントが、急速に現実味と大きな魅力をもって湧き上がった。それが「疫学調査」である。ここでとりあげた「場所」とは単に空間を意味するのではない、調査主体と対象者の関係を「疫学調査」として新たに定めることである。

V. コミュニティ疫学試論への展開

2008年4月麻布大学に移籍して、これまでまったく接点のない分野の研究者に接するようになった。多くの同僚から、「疫学的研究をやってみないか」と勧められた。広い意味でのアニマルサイエンスに関わる、彼らの研究分野では総じて、すぐに結果が出る研究を行う研究者は多いが、疫学のように時間がかかる研究はやる人が少ないと耳にした。そこで疫学のテキストを開くと、後半の記述疫学は地域調査と違いがないように思えたのである。疫学への関心とヒントはこんなことから筆者の中で芽生えはじめた。比喩的な表現をすれば、社会学的なレンズの「絞り」を増し、その分長くなった「シャッタースピード」に耐えうる方法の確立が必要だと考えた。調査テーマによっては、感度の高いフィルムを使うことも必要かもしれない。筆者はこの研究を通して、疫学的調査という「絞り」を選択し、その「シャッタースピード」に耐えうるようにPCR分析⁽³⁾を併用して、この課題に応えたいと考える。「絞り」を増すことはピントがあっている点の厚みが増すということである。個人にピントを定めつつ、ペットを中心として家族におよぶ焦点を定め、背景としての「ペットフレンドリーなコミュニティ」をも撮りこんでみようと思ひ試みる。ここで用いた「ペットフレンドリーなコミュニティ」とは、ペットと人間にとって暮らしやすい地域社会であり、ペットにとってセキュリティが保証された空間である。

「ペットフレンドリーなコミュニティ」研究の目的は、記述疫学的な方法と地域調査を併用して、ペットをめぐる実態の一部を示し、ペットフレンドリーなコミュニティモデル構築を試みることである。地域調査においては、それぞれの地域文脈があり、国際的な比較を行うことの困難は大きい。しかしながら、疫学研究との出会いは、地域の文脈を超えた比較をより広げるのではないと思われる。

この目的は2つの挑戦的な支柱に支えられている。

1つは既成の社会調査法とは異なる、新たなアプローチを提案することである。疫学の一分野である記述疫学は、社会調査と似た方法を用いており、前述した厚みのあるピントを構築できるということを示したい。

2つ目は個人、家族、居住、ネットワーク、コミュ

ニティを、ペットを中心に据えて、新たなコミュニティのイメージを描くことである。具体的には、2012年秋に実施した麻布大学附属動物病院での調査、2013年夏に実施したアメリカ合衆国カリフォルニア州サンフランシスコ市およびニューヨーク州ニューヨーク市ブルックリン区でのドッグランおよびドッグパーク調査、2014年夏にブルックリン区およびカリフォルニア州バークレイ市で実施したドッグランおよびドッグパーク調査結果を分析する。

VI. 疫学研究とその方法について

疫学研究者である鈴木匠亮ら（鈴木ら、2009: 38）によれば、「疫学は衛生・公衆衛生学すべての基本中の基本であり、集団の健康レベル（疾病現象）を測定し、その原因を解明するとともに予防対策を立案し、その効果を評価する」研究分野である。鈴木らは、疫学を「人間集団における疾病の分布とその発生原因を研究する科学」と定義している。この点からは、人間集団を対象としていることから、動物を対象とすることは考えられていない。「ペットフレンドリーなコミュニティ」を視野とする本研究では、ここであげられている疾病に人獣共通感染症を含むと考え、コミュニティ疫学の可能性を検討した。

疫学は疾病の分布と発生原因を研究し、感染症発生の差異の原因と条件のあり方を調べる研究分野である。鈴木らによればそこには個人ではなく、集団全体から疾病の起こり方を観察する、予防医学的側面が含まれている。また彼らは、疫学が分布状態を記述する記述疫学と発生原因の分析を行う分析疫学からなると説明する。鈴木らによれば、記述疫学における記述は、「人間」「空間」「時間」⁽⁴⁾という軸から行われる。これらの点については地域研究においても見逃すことができない重要な視点を共有している。

鈴木ら（2009: 38）は「人間」に関する記述法としては、以下のような要因を挙げている。要因は①性別および年齢、②人種・民族、③遺伝、④体格、⑤性格・心理、⑥結婚・妊娠・分娩、⑦嗜好、⑧職業、⑨社会経済状態・教育歴、⑩宗教・風俗習慣であり、鈴木らは①性別および年齢が最も重要な要因であると論じている。コミュニティ疫学と題した本研究でも、①性別および年齢、⑥結婚・妊娠・分娩、⑧職業、⑨社会

経済状態・教育歴を質問項目として採用した。「ペットフレンドリーなコミュニティ」を目指す本研究では、上記の4つの要因を説明変数として採用することが妥当であると考えた。さらに飼い犬と飼い主の間の歯周病伝播を取り上げる場合には、上記の要因には含まれていない居住の実態が必要になるだろう。加えてコミュニティのあり方を探るうえで、ネットワークとしての「ペット友人」を付け加え、「ペットフレンドリーなコミュニティ」とそこにおける「シビリティ」(civility)を調査研究の中心に据えることを考えた。ここでの「シビリティ」はコミュニティの成員としての、「礼儀正しさ」「丁寧さ」である。

VII. 疫学研究から新たな社会疫学研究へ

アメリカの医療社会学者レオナルド・シーム (2000: ix-x) によれば、社会疫学 (Social Epidemiology) は個人レベルにとどまるものではなく、家族・近隣・コミュニティ・社会集団への注目が必要となる。シームは疫学における「コミュニティ調査」が個人の行動と、疾病の発生に結びつく特性の綿密な記述からなるとしている。シームは社会疫学が大集団のなかの人々の臨床的調査法を採用すると特徴づけている。

共にアメリカの公衆衛生学者であるリサ・バークマンと社会疫学者イチロウ・カワチ (2000: 3-8) は「疫学は人々の健康の決定因と広がりを持つ」という定義を引用しつつ、社会疫学のテーマは、コミュニティの文脈における疾病の社会的決定因と、さまざまな健康の悪化に影響する社会的条件を探ることであると宣言する。彼らによれば、疫学の古典的研究では、貧困や劣悪な住宅、労働環境に注目が置かれているという。彼らは疫学の新しい視点として、文化変容、社会的地位、地位非一貫性、生活変容による説明の有効性をあげている。その考えによれば、変容する社会構造における、個人の位置がしばしば人を弱体化し、特定の行動パターンが特定の疾病に導くと考えられている。さらに現在は、社会解体、移民、差別、貧困、過酷な職業生活が個人の弱体化の契機となっており、「個人レベルとブラックボックスの疫学」から、「新しいマルチレベルの疫学」への転換が求められていると論じる。この点は、原子化した個人が、どのように現代社会を生きるかという問題とイコールであることができるだ

ろう。彼らの主張からはライフスタイルに対する社会疫学の関心をくみ取ることができる。疫学研究から社会学を含む社会科学への多様なアプローチに対して、社会学はこれまでに応じたことがあっただろうか。数少ない先駆的な研究業績としては、園田恭一 (2010) や中川雅貴ら (2013) をあげることができる。

都市的な生活環境の実態に迫ろうと考える筆者の視点からは、都市的ライフスタイルに対する社会疫学的視点が、新たな課題になっていると考えられる。疫学研究には具体的な方法として、記述疫学が含まれている。記述疫学は地域調査と同一の対象を、きわめて近接する、異なるルートからのアプローチと考えられる。そして、バークマンらが論じるように、記述疫学においても家族・近隣・コミュニティ・社会集団への注目が求められている。さらに、古典的疫学から社会疫学への転換と同様に、社会調査における地域調査の再考が求められているのではないかと。

筆者は社会疫学の方法と視点に、地域調査の新たな可能性とチャレンジを見出す。しかしながら、その弱点をあらかじめ指摘しておくことは意味があるだろう。疫学的方法に接近すればするだけ、固有の文化に基づいた視点はぼやけてしまう。

VIII. 「仮説の観察可能な含意」検証として調査

前述のような弱点を乗り越える工夫とは何であろうか。社会学と疫学の間を考えると、量的なデータを取り扱う定量的研究と、数量になりえない質的データを扱う定性的研究の視点を超えて、新たな地平を模索する必要がある。この点については、アメリカのマクロ経済学者であるキングら (1994=2014) が論じている。キングらが考える社会科学的方法とは、現実の世界を対象に詳細な記述による記述的推論と、因果関係を提示する因果論的推論を行うものである。ここでいう記述的推論とは、観察を用いて観察されていない事実を学ぶことであり、因果的推論とは、観察されたデータから、因果関係を学ぶことである。また、キングら (1994=2014: 6-7) によれば研究とは「本質的に不完全な研究設計と不完全な経験的データに、推論の論理を不完全な形で適応していくものである」と論じている。

キングらは、理論とデータの結合について、「仮

説の観察可能な含意 (Observable Implication)」の重要性に言及している。記者上川龍之進による注(1994=2014: 11)によれば「仮説の観察可能な含意」とは、その仮説が正しければ、当然に生じるはずであろう事象である。キングらは「仮説の観察可能な含意」と事実の観察がかみ合うことを求める。キングらは、すべての社会科学において、できるだけ少ないことで、できるだけ多くのことを説明することを要求する。キングらはこの関係を「てこ比」と表現し、社会科学全般での「てこ比」の低さを指摘している。この「てこ比」を高める方法として、キングら(1994=2014: 34-5)は、仮説がもつ観察可能な含意を増やして、それを確かめることを求める。本研究においては、個人一生活様式一疾病を扱うことで、高い「てこ比」を期待できる社会疫学の方法を用いた。

キングらは、事例の収集とその活用方法について、詳細な事例研究では、因果関係に関する仮説を発展させることによって、質の高い記述を補完する効果を持つと論じた。また、彼らは推論が既知の事実を用いて、未知の事実を推測する過程であることから、事実を整理する最良の科学的方法は、事実を理論や仮説の「観察可能な含意」として整理することを提案する。彼らはこれらの利点として、理論の「観察可能な含意」の数を増やすほど、仮説の検証がしやすくなると論じた。加えて、事実を収集することが仮説の「観察可能な含意」を収集することであるならば、定量的研究と定性的研究の共通点を明示することになると論じた(1994=2014: 54-6)。コミュニティ疫学と位置付けた本研究では、具体的な病気の伝播を取り扱うことで、キングらのいう「観察可能な含意」を明確に示すことが可能である。コミュニティ疫学における推論とは、犬への歯周病伝播を左右する変数を具体的に想定することである。コミュニティ疫学では、歯周病菌を検知するPCR分析を含めた記述疫学の方法として、「実証主義アプローチ」が提出する「数量的データを得るための実験や調査」をも可能にしている。本研究ではコミュニティ疫学の特徴として、従来の地域調査の分析にとどまらないアウトプットを期待できる。一例としては疫学調査の利点を活用した、「疾病群」と「健康群」の比較である⁽⁵⁾。

IX. 2013年調査 2014年調査の概要 ——臨床的調査の実践

コミュニティ疫学では、社会調査における実践性をめぐって、これまでの社会調査とは異なる貢献を期待される。ここでいう実践性とは回答者が、大きな関心を持って回答することである。シーム(2000: x)の表現を使うならば、臨床的調査法(Clinical Research)である。具体的な生活関心に応える社会調査としての貢献である。事例調査においては、再現性と代表性の確保が重要な問題となる。コミュニティ疫学では、犬の飼い主という個別具体的な対象から回答を得ている。そのことにより、多くの回答者の求める知見を提示することが可能になっていると考える。調査実施においては、回答者が飼い犬の歯周病菌保有について、調査結果を希望することが多かった。飼い犬の歯周病について情報を得たいという飼い主の関心が調査協力に具体化したのである。このことは調査結果を通じて、「ペットフレンドリーなコミュニティ」の具体的な姿を提示することであり、そこで住民に求められる「ペットフレンドリーなコミュニティにおけるシビリティ」を提示することである。

ここでは2013年および2014年に実施した、男性38名、女性36名合計74票からなるアメリカ調査の結果を分析する。この調査では人獣共通感染症としての歯周病に注目し、ヒトから飼い犬に伝播する歯周病菌「キャンピロバクター・レクタス」(以下、*C. rectus*と表記)をターゲットとした。このことを疫学的に明らかにするため、飼い主と飼い犬の唾液を収集した。この調査結果と唾液サンプルのPCR分析、飼い主と飼い犬の間に*C. rectus*が確認された事例の記述疫学的分析を行う。加えて、回答者の飼育経験・飼育に必要な施設・飼い犬のセキュリティ(旅行時の預け先)・飼育マナー・ペットフレンドリーなコミュニティのイメージについて、分析を試みる。

IX-1. 飼育年数——限られた飼育経験

調査結果全体での回答者の飼育歴については、4ヶ月から12年にわたっている。全体の飼育歴年数をカテゴリー化すると、飼育年数「0～3年」は40名、「4～6年」23名、「7～9年」5名、「10年以上」が6名になっている。

飼育している犬の年齢は、2013年調査での合計46頭の犬の年齢は、9か月から12歳にわたっている。多頭飼いの場合は犬の年齢が上の飼い犬を犬の年齢値として、平均は4.8歳、中央値4歳、標準偏差は3.1であり、飼育年数とほぼ同じである。4歳以上の犬を譲りうけた場合などは、飼育歴よりも飼い犬の犬の年齢が高くなることもありうる。2014年調査での合計35頭の年齢については、3か月から14歳にわたっている。平均は4.0歳、中央値3歳、標準偏差は3.2であり、平均と中央値は2013年調査より低くなっている。調査結果全体についても、2頭飼いの場合はいずれか高齢の値を用いて、カテゴリー化し犬の年齢を示すと、「0～3歳」が31名、「4～6歳」が24名、「7～9歳」が9名、「10歳～」が7名であった。初めての飼い犬として、生後間もない仔犬を手に入れ飼育しており、犬の年齢と飼育歴がほぼ同じである。

IX-2. 飼育に必要なペット関連施設——公園

「飼育のうえで必要な」ペット関連店舗や施設については、「公園」という回答が48名、「動物病院」が17名、「ペットショップ」5名、「その他」1名であった。フィッシャー（1982=2002: 188-92）はソーシャル・サポートを、「相談」「親交」「実用的」からなると論じている。ここでの必要なペット関連店舗や施設は、「実用的」なソーシャル・サポートを表している。

飼育に必要なと考える施設と犬種をクロス集計すると、犬の年齢にかかわらず「公園」が最も回答されている。この回答傾向には、地価の高い大都市という調査地設定の影響がある。「0～3歳」および「4～6歳」では「動物病院」が必要という回答がみられる。「動物病院」は仔犬の飼育にとって必要な施設と考えられている。仔犬の飼育においては、ペット関連商品の購入が必要であると考えられ、「ペットショップ」という回答も少数ではあるが、「0～3歳」および「4～6歳」に複数回答されている。

「飼育に必要な」と考える施設と、分譲や賃貸・戸建や集合住宅という住宅様式についてクロス集計すると、回答者は犬を遊ばせることができる「公園や広い空間」を必要と考えている。住宅様式にかかわらず、「公園」を必要と考える回答が最も多い。アパート賃貸の回答者は、戸建住宅のように庭などのスペースがないため、「公園」という回答が多い。一方で「動物

病院が必要である」という回答は、住宅様式にかかわらず回答されている。この点については、医療面でのサポートが必要な飼い主と、医療サポートが必要ではない飼い主に二分されている。

IX-3. 飼い犬のセキュリティ——旅行時の預け先

家族旅行時の預け先は、住居以外で飼い犬にとってのセキュリティが最も確保される場である。「友人や近所に預ける」という回答が25名、「連れて出かける」が15名、「親族者に預ける」と「専門業者に預ける」がともに10名、「家族旅行をしない」と「その他」がともに3名あった。

友人や近隣に飼い犬を預けるということは、十分なしつけがされているということである。犬と過ごす時間が長い飼い主ほど、愛着の度合いが高く、旅行に連れて行くことになると考えられる。逆に、家族の一員という意識を持たず、愛着の度合いが低い飼い主ほど、犬から解放されたいと考え、預けて出かけようとする。

旅行時の預け先と犬の年齢をクロス集計すると、全体では「友人・近隣」に預けるという回答が最も多い。「0～3歳」では「友人・近隣」や「専門業者に預ける」、「親族に預ける」という多様な選択肢が存在している。「4～6歳」以降犬の年齢があがるにしたがって、「専門業者に預ける」という回答は少なくなっている。また「7～9歳」以降では「親族に預ける」という回答がない。この点は高齢の飼い犬を、親族にとって預けることが大きな負担であると、認識しているからと考えられる。このような回答者は「親族」でなく、互酬性に基づいて「友人・近隣」に預けるか、「旅行しない」か「連れて出かける」に移行すると考えられる。「連れて出かける」は「0～3歳」と「4～6歳」に多く回答されている。この場合は、家族の一員として連れて行くという意味と、仔犬であり飼い主から離すことが困難であるという意図も考えられる。同様に「友人・近隣に預ける」場合でも、犬にとって長距離の移動が困難であるという場合も考えられる。

IX-4. 飼育マナーについて——排泄物としつけ

飼い主としてイメージの悪いマナーは何かについて、「排泄物の処理をしない」という回答が28名、「しつけをしていない」が22名、「必要な予防接種を受け

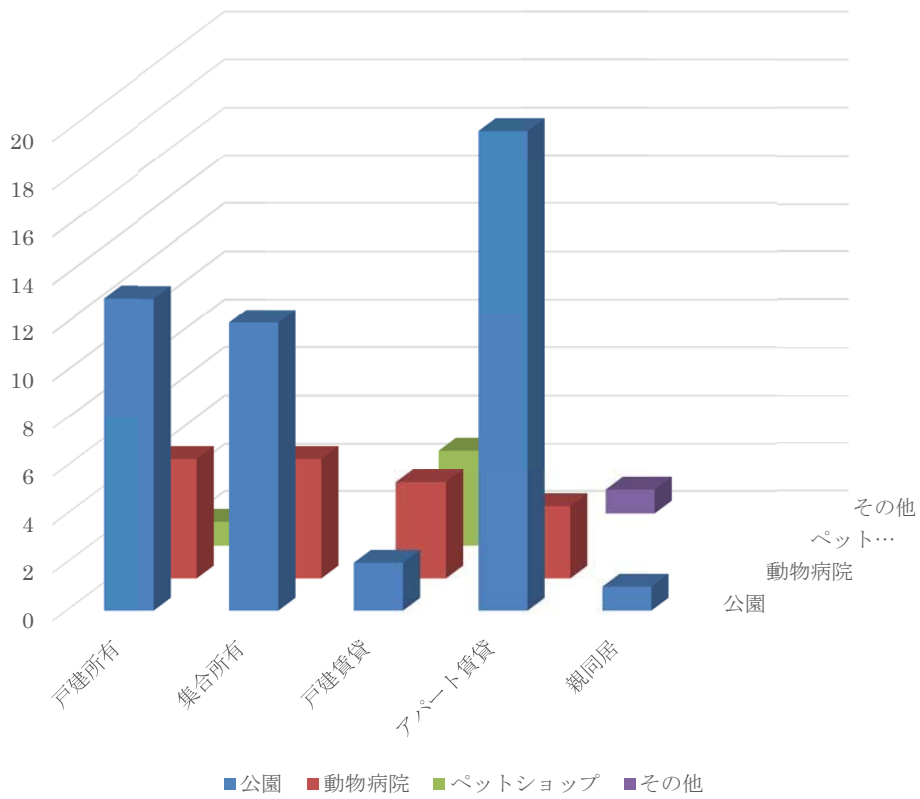


図2. 飼育に必要な施設と住宅様式 被説明変数「飼育に必要だと考えられる施設」と説明変数「回答者の住宅様式」によってクロス集計を行った。(N=71) 単位: 名

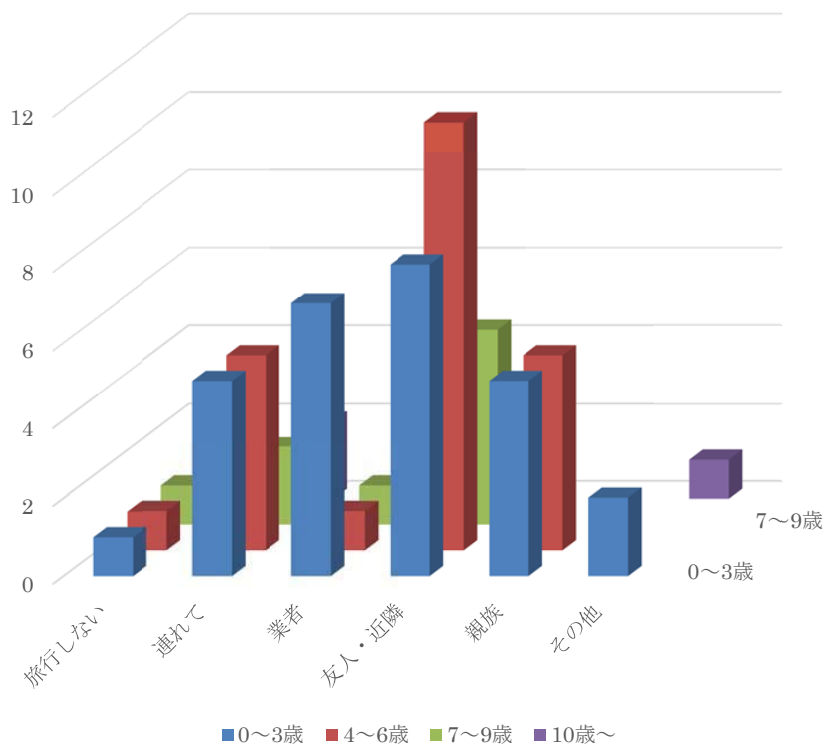


図3. 旅行時などにおける飼い犬の預け先と犬の年齢 被説明変数「旅行時などにおける飼い犬の預け先」と説明変数「回答者の飼い犬年齢」によってクロス集計を行った。(N=65) 単位: 名

させていない」が11名,「いつも放し飼いをしている」が5名,「その他」が4名であった。

「飼育マナーの悪い飼い主のイメージ」と「飼育する犬種」についてクロス集計すると,大型犬を飼育している回答者は,「排泄物を放置する飼い主」と「しつけをしない飼い主」を,マナーが悪いと回答している。大型犬は性格が穏やかで,しつけがしやすい。しかし排泄物の量は多いのでこのような結果となったのであろう。

中型犬を飼育している回答者も同様な回答をしている。一方で,小型犬を飼育する回答者では「排泄物放置」と「しつけをしない」については同様であるが,大型犬と中型犬を飼う飼い主とは異なり,「予防接種をしない」を多くあげている。予防接種をしていないことに対して,悪い飼育マナーと考える回答者が多いのは,アメリカでは犬に関する病気が根絶していないからと考えられる。狂犬病は日本では根絶されたと考えられるが,アメリカでは現在も症例が発見されている。それ以外の感染症についても同様である。これら

の点は小型犬の飼い主にとっては重要な問題なのであろう。

回答者にとって「悪い飼い主のイメージ」と「犬の年齢」をクロス集計すると,「0～3歳」では「排泄物放置」が最も多い。「排泄物放置」が仔犬にとって健康を害する可能性がある,重要な問題であると考えられている。「4～6歳」では「しつけをしていない」が最も多く回答されている。このことは「4～6歳」になると3歳までにしつけを完了していないことが,大きな違いとして表れるからと考えられる。「7～9歳」では「しつけなし」という回答は少なくなり,「排泄物放置」が多くなる。

「飼育マナーの悪い飼い主のイメージ」と「飼育に関する知識源」についてクロス集計すると,ペット飼育に関する知識を「ペット友人から得ている」という回答者は,「排泄物を放置する飼い主」と「しつけをしない飼い主」を飼育マナーが悪いと考えている。これらについてはペット友人から具体的な知識を得やすい内容である。このことはペット友人が,日常的な出

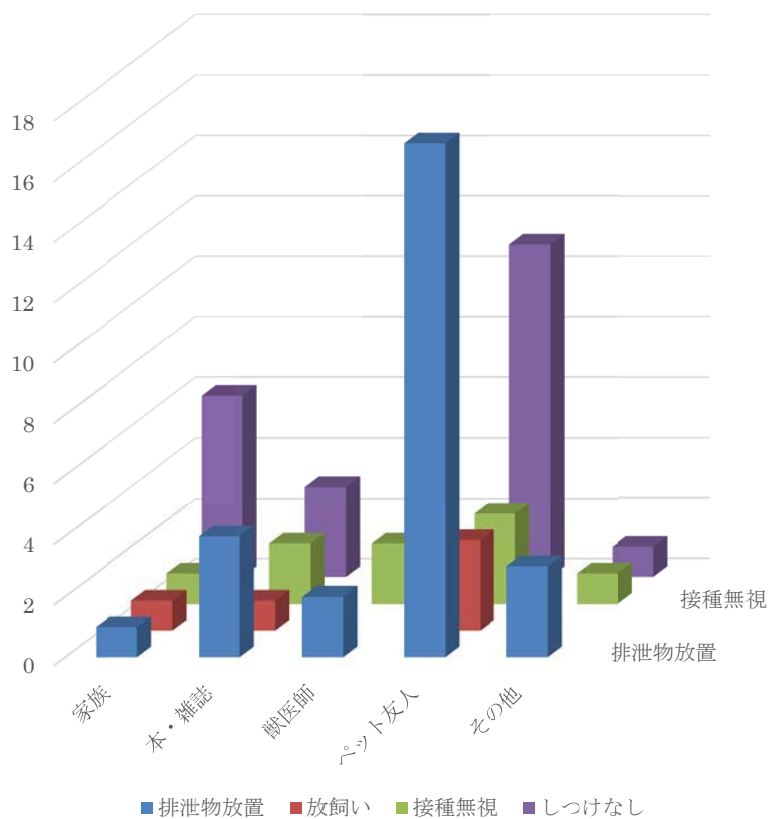


図4. 飼育マナーの悪い飼い主のイメージと知識入手先 被説明変数「回答者が飼育マナーが悪いと考える飼い主のイメージ」と説明変数「回答者の飼育知識入手先」によってクロス集計を行った。(N=63) 単位:名

会場の場としての公園や空間に一体の存在として、認識されていることを示している。「本や雑誌から知識を得ている」と回答した飼い主は、すべての選択肢に回答が分散している。「家族から飼育に関する知識を得ている」と回答した回答者では、「飼い犬のしつけをしないこと」を悪いマナーと考えている。このことは犬の飼育が子どもの教育に近いものと考えられているからである。さらに犬が家族のペットであることだけでなく、コミュニティの一員であると認識されているからであろう。

IX-5. ペットフレンドリーなコミュニティのイメージ

犬を飼育しやすい地域のイメージについて、「広い空間や公園がある」という回答が59名、「ペット友人が近くにいる」が5名、「動物病院が近い」という回答が3名、「ペット関連の店舗が近くにある」という回答が1名、「その他」が3名であった。前述のように「必要なペット関連店舗や施設」は、「実用的」なソーシャル・サポートを示していた。一方で「ペットフレンドリーなコミュニティ」のイメージは、オルデンバーグのいう「サードプレイス」としてのありかたを示している。オルデンバーグのいう「サードプレイス」は「インフォーマルな公共生活の中核的な環境」である(1989=2013: 59)。回答にあげられた「公園・空間」は彼がいうような、日常生活の普通の一コマであり、所有していないにもかかわらず、私有の意識をもたらし、気楽さと利用者の存在の自由を認める空間となりうると考える。「サードプレイス」と「ペットフレンドリーなコミュニティ」の共通性は、徒歩というアクセス方法にも由来する。彼は徒歩という移動手段は、人との触れ合いをもたらし、偶然と非公式の要素が強いと、「サードプレイス」の特徴を明らかにしている。この点は特に「ペットフレンドリーなコミュニティ」における「公園・空間」に必要な要素であろう。

「ペットフレンドリーなコミュニティの条件」と、「飼育に必要な施設」についてクロス集計すると、ペットの飼育をしやすい、ペットフレンドリーなコミュニティの条件と、飼育に必要な施設では、「公園」が最も多く選択されている。「近隣にペット友人が住んでいること」という回答は少ない。飼育知識や旅行時などの預け先では、「ペット友人」が選好されている

が、「ペットフレンドリーなコミュニティ」としては、「公園や広い空間」があることが回答されている。前述したように、フィッシャー(1982=2002: 188-92)はソーシャル・サポートを、「相談」「親交」「実用的」からなると論じている。この点について「動物病院」や「ペットショップ」は、「実用的」なソーシャル・サポートを表している。広い公園や空間を好む飼い主は、こうした場所がペット友人との出会いの場であることから、ペット友人の存在を前提として、「相談」「親交」の場としての公園や広場を選んだと考えられる。ペット友人の存在なしでも、公園や空間を選んだとは考えにくい。2014年調査では飼い主と飼い犬が一気に集まり、一気に離れていく光景を目撃した。飼い犬を解放している飼い主がいないと、立ち去る飼い主も多く見られた。また「公園や広い空間」が必要と考えられていることは、飼い主が日常的に運動量の不足と公園や空間の不足を認識していることでもある。

IX-6. 歯周病ケア—実施頻度—低い実施頻度

飼い犬の歯周病ケアの頻度については、「数か月に1回」が19名、「週に1度」が12、「毎日」が7名、「週に数回」が5名、「その他」が8名であった。その他には、動物病院に行くたびに、ブラッシングなどのケアを受けているという回答が含まれる。この実態では歯周病の防止に効果があるとは考えられない。

「歯周病予防実施頻度」と「犬種」についてクロス集計すると、大型犬を飼育する回答者は「数か月に1回」ケアを行うという回答が最も多い。「週に1回」「その他」という回答が続いている。「毎日」という回答は少ない。

この点に関しては大型犬のケアの方が手間がかかり、実施頻度が低くなっていると考えられる。「その他」という回答は、動物病院に行くたびに獣医師により実施しているなどである。同様の傾向は中型犬を飼育する回答者にもあてはまる。一方で小型犬を飼育する回答者は、大型犬と中型犬と比べて実施頻度が高い。歯周病予防が「毎日である」という回答が最も多く、次に「毎日している」以外の回答が同数である。小型犬は大型犬と中型犬よりも高い頻度で歯周病予防がされている。このことは大型犬や中型犬よりも小型犬の方が、そのサイズにより扱いやすいことも影響していると考えられる。小型犬では歯や顎が小

さく、大型犬に比べると物が口に残りやすく、十分なケアが必要であると考えられる。

IX-7. 飼い主の歯周病有無とPCR解析による歯周病菌の保有

飼い主の歯周病保有について。回答した72名のうち、「保有していない」という回答が57名、「保有している」が11名、「わからない」が4名であった。飼い主の唾液を用いてPCR配列解析を行った。その結果、歯周病菌 *C. rectus* を保有していた回答者は44名、なしが20名であった。8名は *C. rectus* 以外の歯周病菌を保有している。質問票では歯周病の有無について質問し、11名があり、57名がなし、4名がわからないであった。これらの結果は以下のように分類できる。飼い主が、①「歯周病ではないと考えているが— *C. rectus* を保有している」が35名、②「歯周病ではないと考えている— *C. rectus* を保有していない」が18名、③「歯周病であると考えている— *C. rectus* を保有している」7名である。④「歯周病ではないと考

えているが— *C. rectus* 以外の歯周病菌を保有している」4名である。

「歯周病である」と回答した11名は、歯科医師による検査を受けてそう判断していることが考えられる。「歯周病ではない」と回答した57名は、そもそも歯周病であるという意識はない。飼い犬と飼い主の間に同一の *C. rectus* を確認した2事例はいずれも、①「歯周病ではないと考えているが— *C. rectus* を保有している」に属している。飼い主から飼い犬への歯周病伝播の可能性は高く、動物病院における獣医師の指導と同様に、飼い主が歯周病に関する歯科検診を受診する必要を強く感じる。

IX-8. 歯周病菌共有事例の考察——餌と歯周病ケア

C. rectus 伝播について、事例1の場合は小型犬ミニチュア・シュナイザーを飼っており、ワンベッドルームという住居環境から、飼い犬との密接度が高いと考えられる。事例2では大型犬ラブラトルと中型犬ボーダーコリーのミックスを飼っており、2～3ベッ

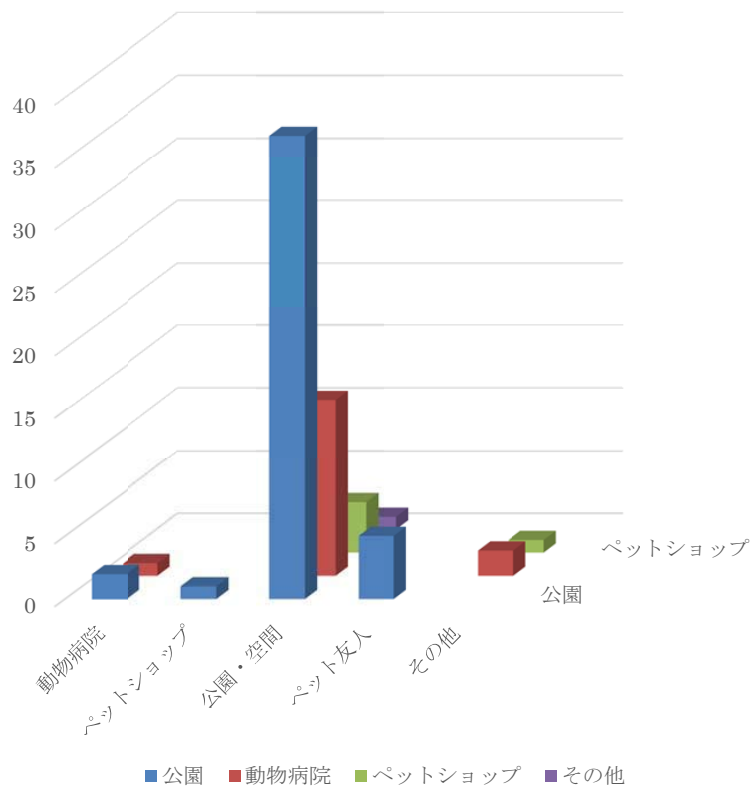


図5. ペットフレンドリーなコミュニティと飼育に必要な施設 被説明変数「回答者が考えるペットフレンドリーなコミュニティのイメージ」と説明変数「回答者が考える飼育に必要なペット関連施設」によってをクロス集計行った。(N=68) 単位:名

表1 歯周病有無の回答とPCR解析結果

	単位:名			
	<i>C. rectus</i> なし	<i>C. rectus</i> あり	その他あり	合計
あると思う	2	③ 7	2	11
ないと思う	② 18	① 35	④ 4	57
どちらともいえない		2	2	4
合計	20	44	8	72

被説明変数「PCR分析による回答者の歯周病有無」と説明変数「回答者による自身の歯周病有無の意識」によってクロス集計を行った。(N=72)

ドルームに住むことから、事例1よりは密接度は低いと考えられる。

事例1では回答者が主なケアを担当しており、餌としてペットフードと食事の残り物を与えていることから、*C. rectus*が伝播したものと考えられる。事例1では、歯周病ケアについて「週一回の実施」であることから、十分な予防がされていないことが、伝播の原因の一つとなっている。

事例2ではケアを回答者と妻で共同して行っており、生肉、ドッグフードと人間の残り物を餌としている。また食器も犬と共有し、犬の就寝場所が飼い主と同じベッドまたは犬用ベッドであることから、*C. rectus*が伝播したものと考えられる。ケアの実施頻度と方法についても、ペット友人からのアドバイスがあったと考えられる。事例2は「週に数回実施」し、ケアとして様々な方法を利用しているにもかかわらず、伝播している。

おわりに

アメリカ人の都市社会学者クロード・フィッシャー(1982=2002: 39)は調査方法と調査結果に対して、さらには調査の彼方にある「全体的な傾向」に対する懸念を、以下のように述べている。

調査にはたしかに落とし穴がある。結局のところ、面接は、ある人、たいていは女性が、別の人に一連の質問をすることから成り立っている。回答者は現実の一部を反映しているにすぎない。また、回答は、質問がどのくらい明確であるか、回答者がどのくらい一生懸命答えてくれるか、面接調査員がど

のくらい信頼関係をつくれるか、面接中にテレビがつけっぱなしになっているか、そのほか調査票、被面接者、面接調査員、状況にかかわる数多くの側面を反映してしまう。こうした事情がわれわれの分析を混乱させ、曇らせることもありうるけれども、通常はそれらが全般的な傾向を隠してしまうことはない。私が焦点を当てようとしているのは、個人の詳細や調査手続き上の「雑音」のなかから姿を現わすこのような全般的な傾向なのである。

本稿では社会疫学における記述疫学の方法を応用して、「コミュニティ疫学」を試論として提示し、調査結果の一部を示した。メゾレベルの研究を再考し、広田のいう「場所」に立脚した研究を示すことができた。今後は特定の場所を経時的にとらえて、コミュニティにおける調整と変容のあり方を課題にしたいと考えている。

謝辞

本稿では、大倉による既刊の調査研究(大倉, 2012)の成果と、それに対する書評論文(広田, 2013)(武田, 2012)(竹中, 2013)をきっかけとして、新たな社会調査方法論の確立に向けた論考を中心として展開し、調査結果の一部に言及した。調査結果の詳細は(大倉, 2016)に掲載されている。本稿は、日本学術振興会科学研究費助成事業・挑戦的萌芽研究「ペットフレンドリーなコミュニティの条件——コミュニティ疫学試論」(2012～14年 課題番号 24653128 代表者大倉健宏)による成果の一部である。

歯周病菌のPCR分析データについては麻布大学獣医学部分子生物学研究室村上賢教授から提供を受けた。改めて感謝を申し上げたい。

引用文献

- Beck, Alan. and Aaron Katcher eds. 1983. *New Perspectives on Our Lives with Companion animal*. Philadelphia: The University of Pennsylvania. (=コンパニオン・アニマル研究会訳. 1994. 「コンパニオン・アニマル——人と動物のきずなを求めて」誠信書房)
- Beck, Alan. 1996. *Between Pets and People: The Importance of Animal Companionship*. West Lafayette: Purdue Press. (=横山章光監訳. 2002. 「あなたがペットと生きる理由——人と動物の共生の科学」ペットライフ社)
- Berkman, Lisa. and Ichiro Kawachi eds. 2000. *Social Epidemiology*. New York: Oxford University Press.
- Delanty, Gerard. 2003. *Community*. Routledge. (=山之内靖・伊藤茂訳. 2006. 「コミュニティ——グローバル化と社会理論の変容」NTT出版社)
- Denzin, Norman. and Yvonna Lincoln. 2000. *Handbook of Qualitative Research Second Edition*. Sage Publication. (=2008. 平山満義監訳・岡野一郎・古賀正義編訳「質的調査ハンドブック 1巻——質的研究のパラダイムと眺望」北大路書房)
- Durkheim, Émile. 1960. *Le Suicide: Étude de Sociologie, nouvelle edition, 3^e trimestre*. Paris : Presses Universitaires de France. (=1968, 宮島喬訳, 「自殺論——社会学的研究」尾高邦雄編『世界の名著 47 デュルケム ジンメル』中央公論社, 49-379.)
- Fischer, Claude. 1975. *Toward a Subcultural Theory of Urbanism*. *American Journal of Sociology* 80: 1319-41. (=1983. 奥田道大・広田康生編訳「都市の理論のために——現代都市社会学の再検討」多賀出版)
- Fischer, Claude. 1982. *To Dwell among Friends, Chicago: The University of Chicago Press*. (=2002. 松本康・前田尚子訳「友人のあいだで暮らす」未来社)
- Fogle, Bruce. 1984. *Pets and their People*. Viking press. (=小暮規夫監訳・澤光代訳. 1992. 「新ペット家族論——ヒトと動物の絆」ペットライフ社)
- Fogle, Bruce. 1987. *Games Pets Play*. London: Marsh & Sheil Associates. (=1995. 加藤由子監訳・山崎恵子訳「ペットの気持ちができる本——ヒトとペットの心理ゲーム」ペットライフ社)
- Ford, Larry. 1991. "A Meta Theory of Urban Structure," John, Hart eds, *Our Changing Cities*, Baltimore: The Johns Hopkins University Press. 12-30.
- 福富和夫・橋本修二. 2002. 「保健統計・疫学」南山堂.
- Haraway, Donna. 2008. *When Species meet*. Minnesota: University of Minnesota Press. (=2013. 高橋さきの訳「犬と人が会おうとき——異種協働のポリティクス」青土社)
- 広田康生. 2013. 「書評」『地域社会学年報』25: 179-180.
- 広田康生. 2006. 「テーマ別研究動向（移民研究）——“共生”を巡る秩序構造研究に向けて」『社会学評論』57(3): 650-660.
- 柿沼美紀・和田潤子・榊原蘭・浜野由香. 2008. 「意識調査から見た飼い主と犬の関係——より良い獣医療およびサービスの提供を目指して」『日獣生大研報』57: 108-114.
- King, Gary. Robert Keohane and Sidney Verba. 1994. *Designing Social Inquiry: Scientific Inference in Qualitative Research*, Princeton: Princeton University Press. (=2014. 真淵勝監訳「社会科学のリサーチデザイン——定性的研究における科学的推論」勁草書房)
- Knight, Peter. 2002. *Small-Scale Research*, London: Sage.
- Layder, Derek. 2013. *Doing Excellent Small-Scale Research*. London: Sage.
- 町村敬志. 2006. 「グローバリゼーションと地域社会」似田貝香門. 「地域社会学講座 第1巻 地域社会学の視座と方法」東信堂 46-66.
- 箕浦康子. 2009. 「フィールドワークの技法と実際Ⅱ——分析・解釈編」ミネルヴァ書房
- マイク・モラスキー. 2013. 「解説」忠平美幸訳「サードプレイス——コミュニティの核になる「とびきり居心地良い場所」」みすず書房, 467-480.
- 中川雅貴・近藤克則・鈴木佳代. 2013. 「健康格差とネットワークをめぐる研究上の諸問題とその克服——大規模社会疫学調査研究の経験を踏まえて」『社会と調査』10: 52-7.
- 中村高康. 2013. 「混合研究法の基本的理解と現状評価」『調査と社会』社会調査協会 11: 5-11.
- 新原道信. 2006. 「いくつものもうひとつの地域社会へ」古城利明. 「地域社会学講座 第2巻 グローバリゼーション/ポスト・モダンと地域社会」東信堂 227-245.
- 大倉健宏. 2012. 「エッジワイズなコミュニティ——外国人住民による不動産取得をめぐるトランスナショナルコミュニティの存在形態」ハーベスト社
- 大倉健宏. 2016. 「ペットフレンドリーなコミュニティ——イヌとヒトの親密性・コミュニティ疫学試論」ハーベスト社
- Oldenburg, Ray. 1989. *The Great Good Place: Café, Coffee Shop, Bookstore, Hair Salons and Other Hangouts at Heart of a Community*. Da Capo Press. (=2013. 忠平美幸訳「サードプレイス——コミュニティの核になる「とびきり居心地良い場所」」みすず書房)
- 武田里子. 2012. 「書評」(2015年12月18日取得)

http://members3.jcom.home.ne.jp/takeda_satoko/pdf/120422_edgewise_report.pdf

竹中英紀. 2013. 「書評」 「都市社会学会年報」 31: 164-166.

園田恭一. 2010. 「社会的健康論」 東信堂

鈴木亮他編. 2009. 「シンプル衛生公衆衛生学」 南江堂

Syme, Leonard. 2000. "Foreword," Berkman, Lisa, and Ichiro Kawachi eds. 2000. *Social Epidemiology*. New York: Oxford University Press ix-x.

本文注

- (1) フォードはこの他に、高速道路エンジニアと、都市再生に関わる多くの担い手のとして、都市デザイン・近隣再生・コミュニティコントロール・ソーシャルサービス・計画家・政治家・コミュニティリーダー・高齢者代表・同性愛者・小売業者・交通エンジニアを挙げている。
- (2) ナイト (2002: 2) は発想の展開プロセスの記録として、"Private writing" の重要性を指摘している。ナイトによる "Private writing" とは以下の項目である。
 - 1 自分に対するメッセージ なぜその研究をしているのか。
 - 2 挑戦しているアイデアについて、探究が示す理解についてメモする。
 - 3 示したいと考える主張についてメモする。
 - 4 行ったことについてのノート (記述) をする。なぜそれらが関係あるについて説明する。
 - 5 質問紙などの概要をコピーして、調査デザインと手段について友人からコメントをもらう。
 - 6 調査者が調査結果に影響を及ぼしているか、その影響の意義は何か自省する。

7 することリストを作成する。

8 「避けることリスト」を作成する。参与観察の位置などを示す。

9 調査結果の公表において用いるであろうわかりやすい言い回し、記述案、聞き取りノートまたはテーマについてのノートを作成する。

- (3) 本研究で用いた PCR 分析とは、DNA レベルにおける分析方法である。この分析は麻布大学獣医学部分子生物学研究室村上賢教授にお願いし、同研究室にて実施した。同学部公衆衛生第二研究室加藤行男准教授には唾液採集方法について、ご教示をいただいた。

2013年調査と2014年調査の分析においては、「麻布大学ヒトゲノム・遺伝子解析研究に関する倫理審査委員会」に研究計画を提出し、外部審査員との面接方式による審査を経て、実施に関する承認を得ている。同委員会では、解析結果について本人に対しても告知に対する制限を課している。遺伝子レベルでの解析結果が、個人に対して大きな影響を与えるからである。本調査研究はヒトゲノムを取り扱わないが、回答者自身に対する分析結果は告知しない。しかしながら、飼い犬については分析結果を求めに応じて告知した。飼い主からの歯周病伝播事例について、その条件を知りたいという希望があった。

- (4) 疫学においては、自殺という病理現象を記述疫学として分析するデュルケーム (1960=1968) 『自殺論』がしばしば引用される。「時間」については、出生年が同一の集団を、加齢を考慮して分析した「コーホート分析」が行われる。
- (5) 「疾病群」と「健康群」の詳細な比較については、大倉 (2016) を参考のこと。